

女性 の 運 動 ・ ス ポ ー ツ 行 動 に 対 す る 結 果 予 期 に つ い て

一 三 島 ・ 沼 津 地 域 の ス ポ ー ツ 参 加 者 ・ 非 参 加 者 の 比 較 一

○ 小 俣 里 知 子、吉 本 俊 明（日 本 大 学） 鈴 木 秀 雄（関 東 学 院 大 学）

<はじめに>

近年、人口の高齢化に伴い、これからの高齢化社会をどのように受け止め、どのように健康で活力ある長寿社会を築いていくかは、今や国民的課題となっていることは周知の通りである。特に女性の平均寿命が延び、女性の生き方の意識や行動も当然ながら大きく変化してきた。それは生活様式の合理化に伴う余暇時間の増大、さらには少子化、核家族化などの変容が原因となっていると考えられる。そのような状況下でも、妊娠、出産、子育て、家事などの役割は女性に委ねられている傾向が強い。それにもかかわらず、ママさんバレー、レディーステニス、女子マラソン、そしてオリンピックにおける女子選手の活躍と、女性のスポーツ熱には目をみはるものがある。そして、女性が新しい種目や記録に挑戦したり、スポーツに参加したりすることに対する社会的な関心が高まってきたことが、女性のスポーツ参加意識の高揚を支えているといっても過言ではない。

加賀ら¹⁾によれば、スポーツへの積極的な参加は、スポーツを行うことによって多くのプラス面の効果が期待できるという結果予期と、自分自身スポーツを継続していけるという強い効力予期が結びつくことによるという。本研究では、実際に現在スポーツ活動を継続している女性（参加群）と、現在はスポーツ活動を行っていない女性（非参加群）では、結果予期という観点からみたとき、どのような意識の違いがみられるかを比較検討することによって、中高年層の女性を生涯スポーツに導くための留意点を明らかにしていく基礎資料とすることを目的とするものである。

<研究方法>

1. 調査対象：調査対象はいずれも三島市、沼津市およびその近郊に在住の女性で、参加群157名、非参加群110名の計267名である。なお、調査対象の年齢は、20歳代から70歳代までと幅広い年齢層となっている。
2. 調査期間および場所：調査は平成8年11月から12月に掛けて実施した。参加者については、三島市、沼津市のそれぞれの体育館でのスポーツ活動への参加時に、集合調査の方法で配布、回収した。また、非参加者については、参加者の近隣に住んでいて調査に協力してもらえる者に対して、参加者を介して配布、回収する方法をとった。
3. 調査内容：肯定的な結果予期に関する項目5項目および否定的な結果予期に関する項目5項目の計10項目とし、それぞれ4段階の評定尺度で回答する方法をとった。
4. 資料の整理方法：処理にはSPSS統計ソフトを用い、参加群、非参加群ごとの有効回答数を基に、 χ^2 検定を行った。なお、各項目への回答が極端に少ない場合には複数の項目をまとめて検定し、自由度1の検定についてはイエーツの修正を用いて行った。

<結果と考察>

表1は肯定的な結果予期に関する5項目についての両群の回答率および χ^2 検定結果を示したものである。表では、評定尺度の「4. よくあてはまる」「3. 少しあてはまる」に対する回答率が高いほど肯定的な結果予期をプラス志向で受け入れる傾向が強いことを示している。まず「上手になれると思う」という技術向上に対する予期の回答率についてみると、参加群では「少しあてはまる」の回答が最も多く、「よくあてはまる」を加えると

かなりの者が肯定的な回答をしているのに対し、非参加群では「あまりあてはまらない」が最も多く、「全くあてはまらない」を加えるとこの項目に対して否定的な者が多い傾向がみられた。この傾向について検討した結果、0.1%水準で有意差が認められた。したがって、参加群では肯定的な者が多いのに対して、非参加群ではむしろ否定的な者が多いことが明らかになった。このことは、前述した効力予期とも関わる部分であり、非参加群をスポーツ活動の場に導くという観点からみると厳しい結果といえよう。

つぎに「体力を高めることができると思う」という体力向上の予期に対する回答率についてみると、両群とも「少しあてはまる」という回答が最も多く、「よくあてはまる」を加えると参加群の方がより肯定的な傾向がみられるといえる。検定では、「余りあてはまらない」「全くあてはまらない」の回答をまとめて行ったが、5%水準で有意差が認められた。この結果は参加群の方がより肯定的であることを明らかにしているが、「全くあてはまらない」の回答が両群とも数名に留まっていることから明らかなように、前項目と異なり両群とも肯定的な意識の者が多い結果となったといえよう。

「友達がたくさんできると思う」という友人関係に対する予期の回答率についてみると、「よくあてはまる」「少しあてはまる」の肯定的な回答が両群とも90%前後に達しており、特に参加群では「全くあてはまらない」の回答が1人もみられなかった。検定では「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の回答をまとめて行ったが、有意差は認められなかった。すなわち、この友人関係に関わる項目については両群とも非常に肯定的な意識をもっていることが明らかになったといえよう。

つぎの「みんなに認められる選手になれると思う」という勝利志向に関わる予期に対す

表1. 肯定的結果予期の各項目に対する参加群・非参加群別回答率および検定結果

結果予期項目		4	3	2	1	N	X ² 検定
		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない		
上手になれると思う	参加	20 (13.3)	76 (50.7)	49 (32.7)	5 (3.3)	150	df = 3 X ² = 22.441 P < 0.001
	非参加	6 (5.6)	33 (30.8)	54 (50.5)	14 (13.1)	107	
体力を高めることができると思う	参加	47 (31.3)	78 (52.0)	23 (15.3)	2 (1.3)	150	df = 2 X ² = 8.68566 P < 0.05
	非参加	17 (15.5)	69 (62.7)	21 (19.1)	3 (2.7)	110	
友達がたくさんできると思う	参加	67 (45.0)	68 (45.6)	14 (9.4)	0 (0.0)	149	df = 2 X ² = 1.621 n·S
	非参加	41 (37.3)	56 (50.9)	9 (8.2)	4 (3.6)	110	
みんなに認められる選手になれると思う	参加	7 (4.7)	23 (15.3)	52 (34.7)	68 (45.3)	150	df = 2 X ² = 15.647 P < 0.001
	非参加	2 (1.8)	6 (5.5)	26 (23.9)	75 (68.8)	109	
健康に役立つと思う	参加	93 (62.0)	48 (32.0)	6 (4.0)	3 (2.0)	150	df = 2 X ² = 7.15590 P < 0.05
	非参加	50 (45.5)	49 (44.5)	9 (8.2)	2 (1.8)	110	

上段は回答数

()内は%

る回答についてみると、前述の3項目とは全く異なり、両群とも「全くあてはまらない」という否定的な回答が最も多く、両群とも否定的な意識の者が多い傾向にあるといえる。検定では「よくあてはまる」「少しあてはまる」の回答まとめて行ったが、0.1%水準で有意差が認められた。この結果は、必ずしも参加群が肯定的であるとはいえないが、非参加群がそれ以上に否定的な意識が強いことを示した結果と受け止められよう。

「健康に役立つと思う」という健康志向に対する予期の回答についてみると、両群とも「よくあてはまる」「少しあてはまる」を加えると90%あるいはそれ以上の高い率で肯定的な回答をしている。検定では、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の回答をまとめて行ったが、5%水準で有意差が認められた。この結果は、両群ともこの項目に肯定的な意識の者が多いが、参加群でその傾向が更に強いことを示しているといえる。

表2は否定的な結果予期に関する5項目についての両群の回答率および χ^2 検定結果を示したものである。表では、評定尺度の「4. よくあてはまる」「3. 少しあてはまる」に対する回答率が高いほどより否定的な結果予期をしている傾向が強いことを示している。

「体を壊してしまうかも知れない」という障害の不安に対する予期についての回答率をみると、両群とも否定的な傾向が強いが、参加群では「全くあてはまらない」が最も多く非参加群では「あまりあてはまらない」が最も多いというように、参加群の方がより否定的な傾向がみられる。検定では「よくあてはまる」「少しあてはまる」の回答をまとめて行ったが、0.1%水準で有意差が認められた。このことは、いずれの群も否定的な意識の者が多いが、参加群の方がその傾向が強いことを示した結果として受け止められよう。

「お金や時間の無駄になる」という経済面での否定的な予期についての回答率について

表2. 否定的結果予期の各項目に対する参加群・非参加群別回答率および検定結果

結果予期項目		4	3	2	1	N	X ² 検定
		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない		
体を壊してしまうかも知れない	参加	4 (2.7)	15 (10.0)	42 (28.0)	89 (59.3)	150	d f = 2 X ² = 21.405 P < 0.001
	非参加	4 (3.7)	19 (17.4)	53 (48.6)	33 (30.3)		
お金や時間の無駄になる	参加	1 (0.7)	3 (2.0)	17 (11.3)	129 (86.0)	150	d f = 2 X ² = 39.249 P < 0.001
	非参加	1 (0.9)	15 (14.0)	37 (34.6)	54 (50.5)		
スポーツ以外のやりたいことができない	参加	1 (0.7)	15 (10.1)	29 (19.5)	104 (69.8)	149	d f = 2 X ² = 38.495 P < 0.001
	非参加	6 (5.6)	29 (26.9)	39 (36.1)	34 (31.5)		
負けたり失敗していやな思いをする	参加	4 (2.7)	24 (16.0)	33 (22.0)	89 (59.3)	150	d f = 2 X ² = 7.323 P < 0.05
	非参加	5 (4.6)	19 (17.4)	38 (34.9)	47 (43.1)		
勉学の邪魔になる	参加	0 (0.0)	3 (2.0)	13 (8.7)	134 (89.3)	150	d f = 1 X ² = 11.153 ^(*) P < 0.001
	非参加	0 (0.0)	3 (2.8)	27 (24.8)	79 (72.5)		

上段は回答数 ()内は%

注: Y-ツの修正による

みると、両群とも否定的な者が多いが、やはり参加群の方がより否定的な傾向が強く、「全くあてはまらない」という非常に否定的な意識の者が86%にも達するというように、より否定的な傾向がみられた。検定では「よくあてはまる」「少しあてはまる」の回答をまとめて行ったが、0.1%水準で有意差が認められた。したがって、この項目についても、いずれの群も否定的ではあるが、その傾向は参加群で特に強いことを示した結果といえる。

「スポーツ以外のやりたいことができない」という他の趣味との関係での予期についての回答率をみても、やはり両群とも否定的な傾向がみられるが、参加群の方がその傾向が強い結果となっている。検定は前項目と同様「よくあてはまる」「少しあてはまる」の回答をまとめて行ったが、0.1%水準で有意差が認められた。この結果は、いずれの群も他の趣味の妨げになるという意識の者がそれほど多いとはいえないが、非参加群の方にその意識の者がやや多いということを示しているといえる。

「負けたり失敗していやな思いをする」という失敗不安ともとれる予期の回答率についても同様、両群ともに否定的な傾向が強く、参加群でその傾向が更に強い傾向がみられる。検定は「よくあてはまる」「少しあてはまる」の回答をまとめて行ったが、5%水準で有意差が認められた。この結果は、いずれの群も勝敗や失敗に対する不安という観点での意識は否定的な傾向が強いが、やはり参加群にその意識が強いことを示した結果といえる。

最後の「勉学の邪魔になる」に対する予期の回答率についてみると、両群とも邪魔になるという意識の者は少なく、特に「よくあてはまる」と回答した者は1人もみられなかった。その中で、非参加群の方に「あまりあてはまらない」という回答がやや多いのがむしろ注目される場所である。検定では、「全くあてはまらない」という強い否定の回答数とその他をまとめた回答数との間について行ったが、0.1%水準で有意差が認められた。このことは、対象者が広い年齢層にわたっていることからどのように質問を受け止めたかは違いが考えられるが、少なくとも参加群の方が邪魔になるということに対して、より強く否定している結果がみられたといえよう。

<まとめ>

三島市、沼津市およびその近隣の女性を対象として、現在スポーツ活動に参加しているかいないかによって、結果予期に対する意識の違いがみられるかどうかについて比較検討した。その結果は、次のようにまとめられる。

1) 友人関係が広がるという点については、参加群、非参加群の間に意識の違いはみられない。また、体力向上、健康志向については、両群とも肯定的であるが、参加群の方がより肯定的な意識の者が多い。勝利志向に結びつく予期に関しては、両群とも否定的な意識の者が多いが、参加群の方に若干肯定的な意識の者が多くみられる。

2) 肯定的な結果予期の中で、明らかな意識の違いがみられるのが技術向上に関する項目であったが、非参加群をスポーツ活動の場に導き出すという点では、最も留意しなければならない結果といえる。

3) 否定的な結果予期の項目については、いずれの項目についても、その否定的な結果をむしろ否定する者が多く、その傾向は参加群で特に強い。

文 献

- 1) 加賀秀夫ほか7名：中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究 一第2報一、平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、1992